

巻頭言

大切なものは何なのか

～ 国のありかたとは何か、根本的に考え直す場として ～
地域と協同の研究センター 代表理事 川崎 直巳



今年7月の地域と協同の研究センター総会を迎えるにあたって、私は昨年の総会のことを思い出していました。昨年3月に、南医療生協が新しい病院に移転し、愛知県ではめいきん生協とみかわ市民生協が合併してコープあいちが誕生しました。昨年は、そんなことを紹介し合い、東海の地域で、いろいろな分野で、協同組合の取り組みが大きくすすんでいることを確認し、「協同っていいかも？」を実感しながら総会を迎えました。この一年前を振り返り、あらためて協同組合の可能性と期待を感じています。

その一つは、東海3県で活動している協同組合や、協同組合に思いを馳せる人たちの、実践による確信が生まれ力になっています。もう一つは地域と協同の研究センターで、協同の担い手を育てていくことが大切と、「組合員理事ゼミナール」や、働くみなさんが一緒に勉強し合う「共同購入事業マイスターコース」を重ね、また「生協の(未来の)あり方研究会」で全国の実践家に学ぶ場を設けて、協同組合について深めることができたということです。

そんなことを積み重ねている時、今年の3月11日に東日本大震災が発生し、私は二つのことを考えさせられました。一つは、私自身の気持ちとしてですが、「大切なものは何なのか」ということです。私は昭和24年生まれです。経済発展・経済成長が当たり前で、ずっとこの間、走り続けてきました。今回の大震災、原発の災害を振り返ると、それで何をもらったのか。経済成長は大切ですが、その目的は、より多くの人が幸せに、安心して暮らせるためではなかったのか。いつの間にか経済成長させることお金をもうけることが第1の目的になってしまっていなかったか。継続的に社会が発展していくために、大切なものがつくられたのでしょうか。もう一度、根本的に考え直す必要があると、痛感しています。二つ目は、日本の国のあり方・方向を問われたと感じています。年と共に、原子力発電は「平和利用」「新しい技術で未解決の部分もあるが国が責任を持って推進しているのだから・・・」「技術力の高い日本だから近い将来には解決策が見つかるはず」・・・などと肯定的に捕らえていた自分がいました。事故後知った事実『人間が制御できない』ことを始め沢山ありました。国策として進められることの問題点や課題を、自分自身で検証し明確な意思を持つ必要があると思いました。

こうした二つのことを考えながら、私は協同組合の可能性や力を今まで以上に考え・実践していく機会として、これからの「地域と協同の研究センター」の活動に期待したいと思います。

岐阜県の協同組合では、14年前から、農業協同組合や森林組合等と生活協同組合と一緒に協同組合間提携を積極的に進めてきました。来年の国際協同組合年を前に、この7月1日「協同組合を考えるつどい」を開催しました。2012国際協同組合年全国実行委員会の委員長である内橋克人さんに講演いただき、思索に富んだお話をしていただきました。「これからの世の中で大切なのは利益共同体が中心になった世の中の仕組みでなく、使命共同体として協同組合が力を発揮し、経済や日本の企業を動かし経済活動で積極的な役割を発揮していくことが大切ではないか」と提起いただきました。これは、グローバル化し、大量の失業者を生んで、大変な状況になった世の中を大きく転換していくために、協同組合が力を発揮することが大切であるとの問題提起であったと、私は受け止めました。

研究センター総会は、多くの期待の声を受けて、これからの中期目標を決定しました。時代の転換期において地域と協同の可能性を確かなものにできるよう、地域と協同の研究センターの場を会員の皆さんに大いに活用していただきたいと思います。「協同っていいね!」と語り合える場をたくさんつくっていきましょう。よろしく願い致します。

特集**第11回総会記念シンポジウム**

“大震災から4カ月 私たちができたこと 学んだこと これからめざすこと”

これまで地域と協同の研究センターでは、「協同と地域でのつながりづくり」について継続して探求してきました。さまざまな活動を行う中で、3月11日、東日本大震災があり、協同組合を始めとして多くの人々が支援に取り組みました。私たちは、そうした経験を紹介し合い、「協同と地域でのつながりづくり」についてももう一度考え合う場として今回のシンポジウムを準備しました。当日報告いただいた、東海の地域で震災支援に取り組み、紹介し合った「できたこと 学んだこと これからめざすこと」について報告させていただきます。（文責 事務局）

基調報告 「今、私たちにできること ～東日本大震災の現場から」

NPO法人レスキューストックヤード代表理事

東日本大震災支援全国ネットワーク代表世話人

栗田 暢之 氏

栗田です。普段は名古屋市東区のレスキューストックヤードというNPO法人として活動しています。今回、あまりにも大きな災害が起きてしまいました。

全国のボランティア組織は、これまで様々な活動をしていました。137万人のボランティアが阪神大震災のときは入りました。阪神は神戸市民だけでも100何万人の都市で、東北の震災と比較すると数字が違います。しかも、阪神大震災のときは新大阪までは新幹線で駆け、阪神電車の青木駅から歩いて行けましたが、今回は歩いて入るのは不可能でした。今回は、報道では少ないといいますが、よくぞのべ50万人も入ったというのが私の実感です。16年の月日の中では、いろんな現場で震災が発生しています。水害、その他、いろんな現場にボランティアがいることが当たり前だという社会に、16年になってきたのだと実感します。

ボランティアの意義について、もう一度整理する必要があります。災害が起こったら、自分の家が浸水被害にあうなど、様々な被害が出ます。日本は災害大国といわれます。私は、昭和51年の安八水害で家に水が入りました。家は寺です。本堂は高台にあり、6世帯が避難してきました。地縁血縁の関係の中で助け合いました。35年前ですが、その時はボランティアはなかったのですが、ボランティアの人はたくさんいました。様々な地縁の恩恵を得て、今日まで災害の場、地縁血縁の関係で助け合いました。2週間くらい水がつかり、どんどん食料がなくなりましたが、周りの方が、家から取り出せるものを持ち寄って、つくってくれた薄味のカレーが忘れられません。ありがたく食べました。地縁血縁の関係の中で、水が引いたら、みんなで一軒一軒掃除して、お風呂も、早く復旧した家でもらい湯をしました。そういう関係の中で日本社会のボランティアの原型が培われてきたと思います。

最近の災害を見ると、毎年どこかで水害が起きていま



栗田暢之氏

す。福井の山奥だとか、広島県の庄原市だとか、過疎化のところでまれではありません。行政がそういう地域をきれいにするのは不可能です。行政は私有地に立ち入れません。残された家の方々も、被害が大変な時には地縁血縁だけでは、がんばれないわけです。助けが必要です。そういう時に、ボランティアの存在は非常に大きいことが確認してきた16年間だったと思います。少子高齢化、地域の疎遠の影響のことを考えると現代社会の中でボランティアが果たす役割が毎年高まってきています。そうした中で今回の東日本大震災が起きました。

3連動での地震が起きるという学者がいたという話がありました。貞観（じょうがん）地震が869年に発生して、この再来で1000年に一回の地震が起きたといわれています。貞観地震の際は、9年後に江戸で、さらに10年後に東海、東南海、南海地震が起きています。ということは、1000年に一回の地震が起きた後に、数年後には東京で地震が起き、その後、他人事でなく東南海が起きることを覚悟しなければならないということです。今後30年の間で、7割の地震が来る確率ということです。3連動といいますが、東海、東南海、南海のプレートは、大分の沿岸部にある日向灘に続いており、さらに台湾まで続いています。東日本大震災が起きてか

ら、地震学者に聞いてもどこまで起きるか想像できないということです。これを総合して専門家でも想定外のことであったということですが、今回の大震災は想定外で済まされる被害ではありません。死者の95%が水死だったそうです。如何に津波の被害が大きかったということです。今回の地震では、全壊・半壊家屋は少なかったそうです。阪神大震災は直下型の地震で、家はぺちゃんこになりましたが、今回は同じ震度7でも、屋根瓦は落ちたが、家は壊れなかったということです。今度来るのはどういうタイプかわからないですが、津波だけを警戒すればよいということだけでなく、揺れの被害を相当覚悟しなければなりません。

今回の大震災では、多くの方が亡くなり、多くの建物が壊れました。避難先の不明者が、たくさんいらっしゃるということです。避難者は16万6千人で、福島県が突出して多くいらっしゃいます。原発事故の影響です。県外への避難者が3万5千人いらっしゃいます。愛知県にも避難されています。全国で3万5千人ということです。どこへ行ったかわからない人が2万人います。お近くで福島から来られた方がいるという情報があったら、「役場に行かれましたか？」と聞いて欲しいと思います。今いる市町村役場に言えば、元いた場所の行政に情報が伝わる仕組みになっています。その方には、福島はどういう状況か、原発の補償問題などのご案内を、直接行政から届けてもらえます。しかし、どこへ行ったかわからない人にはお届けしようがないわけです。どこにいるか把握されないと、災害弔慰金制度があり、一家の大黒柱がなくなった場合500万円のお見舞いが国から出ますが、お届けしようがない。生活再建支援法で家が壊れたら最高300万まで家の壊れ具合によって保障されます。しっかり支援の制度をお伝えるには、どこに避難されたか把握する必要があります。私たち国民一人ひとりが、お隣の人、最近越されてきた方に、声をかけて初めてわかってきます。どこにしようと国民の問題として、東日本大震災で県外に来られた方に気をつかっていただきたいと思います。

福島は、本当に混沌としていて、どう考えればよいか、誰も答えを持っていません。私も全国560団体くらいで、東日本大震災支援全国ネットワークを立ち上げました。福島で111名が参加した現地会議を開きました。そこで5つのことを県外の方にぜひ伝えて欲しいと表明されました。

1つは、次のステージで、仮設住宅の入居が即自立にならないということです。被災者への寄り添いが必要だということです。避難所は、制度として保障がされており、災害救助法の下で、お弁当支給があり、雨風がしのげます。ところが、仮設住宅に入ると、家賃は保証されますが、電気、ガス、水道の料金は自分で払って、自分たちでご飯をつくらなければなりません。しかしみんな

流された人が、今日から仮設ですから、自立ですよということにはなりません。陸前高田で話を聞きますと、仮設に入りたがらない人がいっぱいいます。お金がなく、本当に困窮した方がいらっしゃいます。福祉貸付金は、社協が窓口で、最高10万、困窮した方で20万、愛知県では50万円まで出ます。その総額が、岩手県では総計で10億を超えたということです。当面の現金がなく、当面の暮らしができないわけです。それで、義援金の配分が遅いことに怒るわけです。

2つ目に、一方で、仮設住宅だけでなく、在宅避難者の方もいます。原発の影響でまだ手つかずの家もあり、県外へ避難の方への支援も忘れないようにとのお願いがありました。在宅避難された方は、ほとんどお弁当など恩恵を受けることができず、避難所の方がいいという方もあります。福島の「入っちゃだめ」という区域の方々は、ほとんど手つかずの家があることを忘れてはいけません。そして、やむにやまねず県外へ避難した人もたくさんいるので、その方々の支援をお願いしますと現地で言われました。

3つ目は、地元の主体にした支援の横の連携について、引き続き内外からの応援が必要ということでした。地域に入ったら、その地域のことは考えられないわけです。福島県は広く、いわき市に支援に入った方は、南相馬や郡山の避難所のことは知らないわけです。福島県として、そろそろネットワークを組もうと総会が開かれ、ようやく横の連携が福島で始まります。岩手や宮城では、もう少し早く出来ていました。原発問題が、こうした作業を遅らせています。

4つ目にこの原発問題から目を背けてはいけないということです。

そして5つ目に、こうした問題を日本全体で一緒に考えて欲しいし、夢や希望にあふれる知恵を出して欲しいということです。

いまフクシマチルドレンという言葉ができてしまいました。外で遊んではいけない、プールも屋内だけ、夜な夜な保護者が自分の家の土を削って捨てている、こういうことが既に起きてしまっています。子供たちがかわいそうです。子供たちを何とか健康被害から守りたいということで必死です。支援者側も、子供たちを北海道につれていく計画をして、170名を1週間で、交代で連れて行き、国も浜通りや中通りから会津の青少年の家に疎開してもらおうと計画が進んでいました。ところが、飯館村の方が会議に参加していて、最後に発言され、「子供たちを守ることはよく分かるが、村に子供たちがいなくなったら、私たちの村に未来はない。」と涙ながらに言われました。厳しい選択をしなければいけませんが、誰も答えを持っていません。子どもたちは疎開させなければいけない。しかし、一度いなくなったら、戻ってきますか？5000人避難した三宅島では、4年半経って、



お寺の庫裏

帰ると選択したのはほとんど高齢者でした。若い方は戻りません。福島の方々が本当に厳しい現実の中にいるということを、福島の問題で済まらず、国民の問題として、みんなで考え欲しいと思います。

今回の災害は、地震、津波、原発の災害が複雑に絡んだ複合災害です。東北の沿岸部はほぼ全域、壊滅しました。4ヶ月経ちましたが、今なおライフラインは不完全で、仮設住宅への入居も、地域によって状況が大きく異なります。南三陸町では、水道の復旧率が10%未満です。お母さんたちは、川で洗濯をしています。

私がお伝えしたいのは、瓦礫という廃墟の中に、人が住んでいたということです。人がいたことを忘れてしまいそうになります。写真は、あるお寺の庫裏だそうです。この奥に本堂があります。松が根こそぎ引き抜かれ、津波でドンと当たって玄関がめちゃくちゃです。揺れが大きかったので、この寺から海は見えませんが、地域住民が、津波だと大声で伝えました。行政も警報を出しました。緊迫した現場です。そこで住職は、本堂まで駆け下り、ご本尊を守ろうとしたところ、津波が来ました。流されそうになった住職は、何かにひっかかって留まりました。船に積むコンテナが5km先まで流されています。人間が耐えられるはずがありません。住職は津波が収まって二階へ引き上げられましたが亡くなりました。後日、住職の遺体を解剖したところ、十二指腸まで砂がいっぱいでした。そういう地獄があったということを忘れてはいけないと思います。

私たちがすぐ行きたかったのですが、何もできませんでした。あご「食料の補給ができない」、あし「歩いては入れない・ガソリン不足」、まくら「極寒の地でキャンプ感覚では到底無理」の問題がありました。阪神淡路大震災から16年間、ボランティアセンターをつくりましょうと努力してきました。受け入れ体制も整備してきました。しかし、大震災では受け入れる側の社協の人も死んでしまいました。宮城県社協だけで20名くらいの方が亡くなっています。行政の方も、庁舎も流されてしまいました。地震学者の多くは3階まで逃げればOKと

言っていましたが、5階まで津波がきています。どうしようもなかった。南三陸町のボランティアセンターでがんばっている社協の課長さんがいます。その方の奥さんは未だに行方不明です。そういう方が最前線です。本当に厳しい状況があります。来るべき日のためにNPO側もネットワークを組んでいきたいと思います。

私は食料の補給のため、五日目に仙台に入りましたが、ゴーストタウンです。名古屋の問題は仙台から学ぶことが一杯あります。都市化は憐れです。歩いては入れません。ガソリンはない。タンクローリーを持って、日生協の方は入ったということですが、どこで給油しますか。みんなないので、こっそりしないといけないわけです。自衛隊、消防でも困っていました。ガソリンを満タンにして行っただとしても、帰りに補給しないといけない。そうすると、また迷惑が掛かるというジレンマがありました。

私たちも、かなり訓練した仲間が、ガソリンと食料を積んで、一週間後石巻に入りました。そこでのSOSは悲惨なものでした。とにかく食料がない。食料いっぱい積んで行きましたら、1階が流され、2階で生活していた集落の人に車を呼び止められ、食料を分けて欲しいということで半分差し上げました。震災から1週間も経っているのに、どうしたかと聞いたら3日で食料が底をついたので、流れ着いたものを食べていたということです。これが日本です。私たちの国は普通なら1時間くらい車を飛ばせば食料が手に入ります。しかし、ガソリンがなかったのも、地元の人も動けなかったということです。宮城の仙台までは物資はいっぱい届き、倉庫にありました。なぜ出せなかったか。持っていくはずの行政の方が機能不全です。それからガソリンがなかった。そして気温マイナス7度です。そういう厳しい状況で、当初は行けませんでした。

現在はこういう問題は解消されています。私たちが支援している七ヶ浜も、今日は250人くらいのボランティアが入っているはず。ボランティアもゴールデンウィークをピークに減少し始めますが、それでも、必要などころに必要な支援をしましょうと続けています。支援の内容も、今までは炊き出しや泥かきなど、見えやすい支援でした。しかしこれからは、仮設住宅とか個別の支援に入ってきますので、ちょっと頭をしぼらないといけなくなります。

一方で、ボランティアは足りているという報道が一部にありましたが、その記者は、ボランティアセンターで一部分だけを見て記事を書いたのでしょう。その地域でなく、東北全体を考えて、この地域は足りているのであちらにと、ボランティアも調整をしていかなければいけないわけです。企業からの問い合わせもあり、ボランティアも来ていただいています。そこで研修会をやっていただければいいわけです。夜は自分たちで、ホテルを

探し、松島とか、岩手花巻温泉は生きていますが風評被害で閑古鳥が鳴いていますので、そこに宿泊し、土産を買って、お金を落として欲しいのです。そうして経済を復興させないと、東北はたまらないわけです。平泉の観光に行って、仙台でおいしいものを食べて、被災地の復興に貢献するわけです。日本全体が、東日本のことを考えていかないと疲弊してしまいます。

私たちは足湯をやって、そういうことが分かりました。東京から、大量の足湯ボランティアを送り続け、今まで5000人くらいの人に足湯に浸かってもらいました。足湯は体全体が温まります。手をもんだり、腕をさすったりすると、ほぐれてきます。そうすると、話をされます。それを私たちは「つぶやき」と呼んでいます。そこで津波の恐怖を語る方がたくさんいます。「私はね、泳いで逃げたのよ、もうどうやって来たかもぜんぜんわからないけどね。火事場のバカ力がでたのね。屋根にいた人に引き上げてもらってね。雪が降っていて、気を失ってね、気が付いたら病院で皆に体さすってもらって



足湯

て、担架で助けられたのね。凍えていてね。助かったのが、本当に生きているのが不思議だね、ほんとに。」「地震の時、車ごと流されて、三時間半泳いでやっと丘の上についた。泳いでいる途中、100人以上の遺体を見て、足をつかまれ、色々したけど自分の事だけで精一杯だった。そこから7時間歩いて避難所に着いて、すぐ病院に連れていかれて4日間入院した。1週間、何食べても戻した。一回死んでいるんだ。弟は車の中で死んでいた。見つかって火葬できた、仕様が無い。ビールが飲みたい。お酒も無い。おにぎりやパンは賞味期限ぎりぎりです。パサパサのばかり。」こうして人に話して、バランスをとっています。足をつかまれたんですね。地獄です。こういうことを人に話すことで、気持ちを回復されています。

4月1日のことです。「やっぱりつらくなってくるね。20日も経つからね。ごはんもね。最初はお腹いっぱい食べられればいいと思っていたけど、最近じゃ『あれが

食べたい』とか思ってしまうよね。栄養バランスとかも考えちゃうしね。他所から見たらぜいたくなのかもしれないけど、ちょっと違うんだよね。」「石巻は魚が美味しい所だったんだけど。テレビ・雑誌で見ていたら、なんだかマグロがすごく食べなくなっちゃって。この前もご飯にタラの切り身をいただいたんだけど、身がこんなに薄くて。家で作る時、あんなに薄く切らないもの。」

「野菜を近くで買って来て食べるけど、これだけ食べ物をもらっているのに、食べるのはなんだか悪くてこっそり食べてるの。他に給湯室でお刺身をつくっているおじさんも、ぜいたくして申し訳ないと言っている。」

カップラーメンばかり食べ、栄養バランスが悪い。石巻は、だからこそ炊き出しが必要でした。生協がここに入り、どれだけ助かったか。行政が一日3万食、金はあっても、ものがつくれません。3万人が1か所に居るわけではなく、ここは10食、ここは50食、1000食と違うわけです。弁当を届けるのは不可能でした。そこで、ボランティアが自発的に行った豚汁が、どれだけうまくいったか。どれだけ助かったか。ボランティアの助け合いが不可欠でした。「初めて温かいものを食べた！」という声が1カ月以上現場で続きました。

私は郡山の象徴的な避難所ビックパレットに入りました。そこには2000人が入っておりまして。郡山は、被災地ではありません。コンビニも平常営業しています。たまたまお金を持っており、こっそり野菜を買って食べ、マグロも食べている人がいました。しかし、お金を持っている人以外に、逃げるのがやっとの方もいます。30キロ圏外へと逃げた方など様々です。被災の度合いが違います。私が入った4月当初でも、一つの避難所で、細い廊下に入ると、入った瞬間、人が居ます。寝ていて、寝返りしても、目と目が合わないようには、お手製で、段ボールの仕切りをしています、それが精一杯です。階段以外は、全部人で、弱きも若きも全部ごちゃごちゃです。せめて、空間が分かれていますので「お年寄りとか、弱った方にしましょう！」というくらいしかできていません。集団移転で村ごとに来ている方もいます。2階には役場の機能もありますが、名簿がありません。私たちが来た時に、役場の職員がプラカード持って、人を2時間くらいずっと探していました。役場の機能が果たされていません。人権問題は、ひどい状態でした。そこを改善するために、ボランティアがたくさん入った方がいいということで私たちが入り工面しました。

改善しないといけないと思い、ボランティアを投入して、足湯をやりました。愚痴を聞きました。2階では、喫茶店もやりました。被災者の方に「俺が淹れた方が、コーヒーがうまい」と言われ、淹れてもらいました。確かにうまいので、仕事として毎日淹れてもらうようになり、彼はマスターと呼ばれるようになりました。毎日コーヒーを淹れて、「おいしい」と輪ができ、コミュニケ

ーションができるようになりました。愚痴を言ったり、どこから来たのか言い合ったり、ボランティアと話をしたりするようになりました。この喫茶に名前をつけることになり、うちの村は桜がきれいだからという話があり、喫茶「さくら」としました。ボランティアが画用紙を切って、大きな枝をつくり、ピンクの色紙に願いを書いてもらい、花をつくりました。満開に咲いています。殺風景だった壁が桜いっぱいになりました。みんなでつくったという達成感があります。

そして、自治会ができ、周辺の草むしりを5月にやろうとボランティアが呼びかけました。20人くらい来てくれたらいいと思っていたら、次の朝250人集まりました。みんな、なんとかしたかった。なんかしたいと思ったきっかけが、草むしりであり、コーヒーショップでした。7月末に、ビックパレットは解消されます。やっとコミュニティーができたのに、またバラバラになります。何カ月かここで生きた証に、子どもたちを褒める意味でも、みんなで16・17・18日と盆踊りをやろうと計画されています。劇的な変化があり、避難者に対して、ケアではなくて一緒にものごとをつくる、被災者が自立する、その瞬間に立ち会うボランティアは、ボランティア冥利に尽きると思います。

復興は、どういうキーワードか、やはり、人の気持ちに戻るのが大事です。

今後どうするか。「私は家がなくなった。その日は卒業式で、帰ったら家は何もなくなって・・・。」みなさんは、この子になんて声をかけてあげますか。この子に、明日の日本をどう語りますか。みんなでやらないといけないと思います。しかし、応援しすぎもいけないと思います。高校1年生で、家が無い、お父さんが亡くなった。この心情を、しっかり支える、聞くことしかできません。

私たちも、ボランティア自身のケアも大事です。辛い事を直接聞いて、ボランティアの惨事ストレスがあります。話を聞いてドキドキします。辛いことを直接聞いて心が痛む「惨事ストレス」、別世界の被災地から現実に戻ってギャップを埋められない「バーンアウト」があります。あまりに激しい思いを聞いた時には、コミュニケーションが必要です。これは異常じゃなくて、むしろ私たちの正常な心の働きです。これを正常に働かせるには、家族や友人、専門家に相談しないといけません。最初に入った人は、遺体がずっと並んでいるのを見ています。首のない遺体をみている。そういう場合は専門家に相談しないといけないケースもあります。ボランティアのメンタルケアも十分注意しなければいけません。

私は、5年くらい前に、宮城県のほとんどの自治体を、防災講演会で回りました。七ヶ浜町には会員になっていただきました。七ヶ浜町は、七つの浜にぐるっと囲まれていて、ぐるっと海岸線がやられました。そこは小さな町で、50m、100mダッシュすれば高台です。そ

れでも100人死んでいます。日本財団の支援を受けたボランティアきずな館があります。ボランティアだから劣悪な環境でいいということではありません。ボランティアだからこそ、ちゃんと寝る、リズムが必要です。当初のボランティアは、徹夜状態で泥かきでした。体がきついで、拠点がいります。規則正しい生活をする拠点が出来ました。炊き出し、物資の運搬、泥出しをしました。考えなければならないことが、変化していきました。一つは、住民にどうシフトしていくかです。たまたま地元の主婦のグループが「厨房を貸して!」とみえました。70～80歳を過ぎた方が、いつまでもカップラーメンを食べてみえ、「これは見ていられない!」ということを言われます。野菜の漬物、和え物とか出したいと言われました。私たちは、新燃岳の被災地を支援していましたが、灰をかぶって売れない大根を持って行けということで、たくさんの新燃岳の野菜を提供頂き、届けました。上手に調理して出していただきました。

現在は、避難所から120歩、仮設からも500歩のところで、お茶飲みサロンをやっています。避難所では、この方は家が流され、この方は家族が亡くなり、もっとひどい人もいて、私は泣けないわけです。私だって大変だったと、他人に話すことが必要です。他人だから話せ、息抜きになります。津波が怖いという話は、みんなが体験した町の人には言えない。津波が大変だった、気をつけなければいけないということを、新しいボランティアさんに言うわけです。次の日本を担う若い者に伝えなければと、仕事のようにして言っています。いろんな輪が少しずつできています。

仮設住宅の集会所でも、出張でやって、七ヶ浜町ボランティア友の会のグループが喫茶店のお世話していただいています。



仮設住宅

仮設住宅の説明会では、能登半島地震の穴水町の方々が、電話を待っていたと言ってバスで、みんな来てくれました。仮設住宅の経験者です。行政は、仮設住宅は

レンタル品ですから、画鋏で留めたらだめと言います。そうマニュアルに書いてあるらしいです。それじゃあ、カレンダーを留められないわけです。「貼ればいいですよ！」と経験者は言います。隣同士で暮らす家族二世帯が、最初は玄関で行き来していましたが、そのうち中をくり抜きましたと言われます。それでも怒られなかった。実話としてここで話をしてもらおうと、かなり有効で、「ちょっとホッとした。」という声をいっぱい聞くことができました。

被災者の方にとってはここが故郷です。ここが我が家です。瓦礫はゴミじゃない。昨日まで大事に使っていたものばかりです。被災者の目線に合わせ、今、現場で何が起きて、何が必要かを被災者本意に考えることが必要です。よそ者ががんばりすぎると、地域が見えなくなってしまう。地元の主婦、中学生、地元のボランティアグループが前面に出ないといけないわけです。地元主体で、ゆっくり、ていねいにやってあげる必要があります。相当時間がかかります。5年、10年たっても課題は残ってきます。

阪神大震災で、いま何が課題か、ご存知ですか。震災障害者の方々が問題になっています。震災の時に致命傷をおって、下半身不随になったり、重い病気になったりした方々です。そういう方々が、今、クローズアップさ

れています。阪神大震災を語る時に、いの一番に亡くなった方、6340人より、お前たちは命があったから、まだましと言われてきた方です。震災障害者は、遠慮があって、声を出せませんでしたと言われます。生活の困窮は著しいわけです。復興住宅では高齢化が進んでいます。一日、会話時間7分です。病院やコンビニで一方通行がほとんどです。お友達の平均の数が4人です。これが実態です。こうなったらダメです。東日本大震災でこういうことが起きないようにどうしたらよいか。しかも原発がある。命からがら逃げてきた県外避難の方々がその思いを持って来ています。その思いが前提条件で来ています。長崎に来た人になぜか聞くと、長崎には原発医療が充実してるし、差別されないからということです。思春期の人たちは苦しめられています。「放射能がついているんじゃないか」と言われる。こんなことは日本社会で、あってはいけないことです。愛知に来た人にも言うてはいけない。今、県、市といっしょにやろうとしています。

仲間を一人一人増やし、繰り返し続けていくべきことが起きてしまった。東日本大震災は神戸をはるかしのぐ災害です。顔が見える関係を超えて、心の通う関係をつくりたいと思います。一方的な話でしたが、ご清聴ありがとうございました。



現地生協の状況報告と生協間支援の報告

コープみえ 山下 隆之 氏

コープみえ山下です。私たちにできることを先ずしようと、支援に取り組みました。被災地の支援として私たちができること、準備するべきことという2つの視点で報告をします。

宮城県の状況ですが、支援参加者からは生々しい報告が寄せられています。津波後の小学校の火災など、私も見させていただきましたが一言では言えない状況でした。緊急支援は、全国からの物資を、事業所別に仕分けし、共同購入のトラックで配送することをさせていただきました。現地の職員と一緒に、お見舞い訪問を通じて安否確認に取り組みました。

大震災から3ヶ月が経過して、5月30日に日本生協



被災したビニールハウス

連で報告がありました。津波の被害が残っている所もありますが、きれいに片付けが終わった所もあり、家がない所もありました。私が支援に行った所は、多賀城市から仙台空港の辺で、海に近いところです。3ヶ月過ぎても、まだ、水田には海水が残っています。ビニールハウスが、津波でつぶれています。

3ヶ月経過した女川の漁港では、水産加工場の保管庫が押しつぶされて、魚が外にでて、腐敗臭がして、厳しい環境でした。

みやぎ生協では職員で亡くなられた方が15名、職員の家族で亡くなられた方が80名と聞いています。本部は、天井壁が落下しています。耐震工事をしていたということですが、建て替えが必要で、それには1年以上かかるそうです。

店舗の閑上（ゆりあげ）店ですが、5月31日の状況は、周辺は片づいていますが、店内はひどい状況です。この店舗は閉鎖が予定されています。店舗の周辺は津波で家がなにもない状況です。みやぎ生協は、商品の損失で14億、3月の供給減で13億、営業できないことにより50億、店舗関係だけでそれだけの被害があったと聞いています。他の店舗も継続できるかどうか、判断が必要とのことです。



みやぎ生協 閉上（ゆりあげ）店

東海コープグループでは、緊急募金に取り組みました。また、商品の企画で支援企画として、地域の物産で南部せんべいとか油麩など人気商品で、共同購入、店舗で取り組みます。売り上げの1%を義援金とする取り組みを6月4日と7月5日に実施しました。緊急人的支援として、東海コープグループとして35台の車両、荷物を積んで行きました。共同購入のトラックのサイズがよかったということです。みやぎ生協でも現地の訪問活動で非常に役に立ったと聞いています。主な取り組みとして、店舗被害、店舗の再開支援として片付け、物資の配達、共同購入の再開支援として同乗、安否確認、支援物資の提供をしました。

参加者からの共通した声として、現場を一度見て欲しいということが出されています。目を覆いたくなる光景

がいたるところにあり、あまりにも悲惨な実態を体験して欲しいということです。

支援の際、すれ違う車は消防自動車、パトカー、救急車、次に生協のトラックです。緊急支援でいち早く動けたということはよかった点だと考えています。

参加したメンバーが現地の取り組みから教わったことは、みやぎ生協では、店内での怪我人が、かすり傷程度の一人ということでした。災害避難訓練が活かされたということです。また、震災当日はヘッドライトを照らして販売を続けたそうです。共同購入の場合は、物流が途絶え、燃料不足が起こり、事業としては休止せざるを得なくなり、共同購入登録者への見舞い訪問が大きな活動の柱になったということです。

将来に向けて考えておかなければならないことは、当たり前前のことができない状況がある中で、私たちが被災した状況を想像して対応できるかどうかということだと思います。当たり前前のこととは、共同購入では配達を行うこと、店舗では営業を続けることですが、災害マニュアルが役に立たない状況になり、連絡も取れない中では、一人ひとりの判断が求められるということです。例えば、店舗でも営業を続けるために、商品が入ってこない、電気も通らない中で、在庫の298円のパナナを販売するには、代金で釣り銭がいらないようにし、いくらだったらいいか、現場で決めたということです。そうしたことが求められ、この経験は、語り継ぐことが将来に役立つと思います。



被災者を受け入れて

愛知県 被災者受入対策プロジェクトチーム 菊地 学 氏

愛知県庁の、被災者受け入れ対策プロジェクトチームの菊地です。プロジェクトチームの役割は、県内に避難された方を、どのように支援していくかということで、県庁内の10数名で、受け入れのためのチームを立ち上げました。

愛知県内に避難されている方は、既に1200名以上です。実際はもっとみえると思います。例えば、親戚などを頼って来られ、被災者でなく、子供が心配なので来た、被災者ではないという手を上げない方も含めると相当数の方がいます。愛知県ではこうした方々に「役場で避難者登録してください」と呼びかけています。そうしないと支援が届けられません。引っ越してきて転勤なのかなんなのか、分からないので、遠慮なく申し出てもらう仕組みをつくりました。同時に県営住宅を確保しました。着の身着のまま避難された方にバスタオル、茶碗などの生活必需品の手配、ニトリさんの支援のふとん、エイデンの家電品など配りながら、やれることを一つひとつ行ってきました。同時進行で、栗田さんとか向井さんと意見交換させていただき、行政だけでなく、みんな

で支える仕組みを考えていこうとしてきました。これは、目の前にある被災者だけでなく、愛知県として、東海・東南海地震などで同じ立場になった時のことを考えて、ネットワークを組み、今回のことを教訓として活かすための仕組みを同時につくろうと、愛知県被災者支援センターを、6月中旬に立ち上げました。

何をやっているかというと、被災者の孤立、孤独、情報が届いていないとの心配があり、情報を提供できるようにしています。そのために「あおぞら」という情報誌をつくりました。国からのお知らせ、愛知県からのお知らせ、地元からのお知らせをお渡しします。企業からの提供物資をつなげ、例えば劇団四季さんが、県内避難の方に元気になってもらえるよう、招待されたイベントを繋いでいます。

併せて、交流会があります。こちらに来て知り合いもない中で、3日間誰ともしゃべっていないという方もみえ、交流会を開催することにしました。「あおぞら」の紙面にあるように、6月19日には豊橋で交流会をしました。福島の方が多かったですが、久しぶりにお国のこ

とばで話し、2時間、自由に雑談してあっという間に過ぎました。こういう場をもっとたくさんつくっていくことを考えています。

そうした中で、住んでいる市町村の役場をどうからめるかということがあります。県庁の職員は、距離があり、地元の市町村が支えるには、どこまで動けるかが一つのポイントです。各市町村の担当者のところへ行き、現状をうかがいながら、今後どうするかを相談しています。パーソナルケアまで踏み込むか、意見交換しながら進めています。支援センターをつくったところ、さまざまな方が訪れます。先日もボランティアの方が、被災地に行けないので、相談にのってもらえないかとか、学生さんも県内避難者の支援をしたいという方がみえました。そうした声がたくさんあり、具体的なプロジェクトにして

いきたいと思います。県庁の看板で少し信用があるので、上手に使っていただきながら、具体化していきたいと思っています。

今後の課題として、画一的な物資を渡すのは難しくありませんが、精神面でダメージを受けている人が多く、相当危ない状況もあります。相談があった方に対して、市町村と連絡をして、具体的に、弁護士、臨床心理士、専門家に協力いただいてサポートする仕組みをつくっていきたいと思います。今後迎えるだろう、東海、東南海地震のシミュレーションとして、勉強するいい機会になっています。市町村とNPO、企業など連携しながら一緒にすすめ参ります。愛知県でも、できることをできる範囲で、無理しないで、少しずつ進めようと思っています。皆さんのご協力をいただければと思います。



東日本大震災に係るJAグループ愛知 復興支援対応について ～大震災発生から現時点までの支援活動の報告～

JA愛知中央会企画部 部長 岩橋 良直 氏

愛知県の農協中央会の岩橋です。日頃は生協さんとは、愛知県は野菜王国ですので、米、野菜取引など関係を持っています。食農教育の場づくりも一緒にさせていただいています。同じ協同組合といっても、成り立つ法律が違ったり、会員とする対象分野が農家であったりと違いがありますし、JAは全中を中心とした経営組織があり、日ごろ付き合いや知り合う機会はやや乏しいこともあります。このテーマの中で、農業協同組合として愛知県の取り組みの事例をご紹介したいと思います。

生協さんの取り組みの報告がありましたが、実に共通項が多いと実感しました。連携したわけではないですが、結果的に支援活動で共通項が多いと実感しました。愛知県には20の農協があります。中央会としての連合会があり、JAグループあいちをつくっています。そこでの復興支援の概略を報告したいと思います。

4点あります。1つは、募金、義援金をさせていただきました。県内に30の組員がみえまして、役職員も女性部・青年部等、15000人に呼びかけ、4月末段階で2億4千万円ほどの義援金が集まり、JA全中に送金をしました。

2つ目に、食料等の救援物資を届けました。JAの特徴は、農産物をつくっているということです。地元で採れた農産物で備蓄用品として米など持っていますので、それらを積み込んで、第一便は一週間をめぐり、福島から順番にもって行きました。総量は、県域で45tということで10トントラック5台分です。小型で持つと、帰りにガソリン補給が必要ということなので10トン車で往復補給なしで行って来ました。

3つ目が、JAグループとは別に、単位農協が自主的

に取り組みを行って来ました。

4つ目は、人的支援です。私も今週、昨日まで宮城へ赴いて、圃場の瓦礫の撤去や、市中の溝さらいをやってきました。遠隔地で足を確保し、ご飯を確保するのが大変でした。支援チームの派遣を3回行ってきました。さらに今月末に4回目を行う予定です。

JAの職員なり、施設にもおおきな被害がありました。農業の被害として、3県で22,763ha、1農家当たり1haが平均ですので、2万2千人の農家が被害にあったということです。沿岸部の農協に行くと、ほぼ9割、8割の農地が海水に冠水しました。その被害が、甚大でした。冠水した農地には、瓦礫がまだかなり残っている状況です。

今回の特徴は広域に及ぶということです。大半は漁村、農地です。4ヶ月たって、農地の瓦礫撤去はまだ進んでいないのが実状です。

また、原発の事故で大きな被害があります。農産物の出荷制限がされ、廃棄しています。風評被害もあり、買い控えで、通常100円で売れるものが40円、50円ということです。なかなかこの風評被害損害額の特定が難しく、この保障をどうするかが課題になっています。土壌汚染も大きな問題です。20キロ圏内では、降り積もった放射能が、かなりの量になっており、作付けができない農地が広範囲にあります。これの回復をどう図るか、早めに吸収吸着なりして、土壌浄化を進めていくことが大きな課題になっています。

緊急輸送もしました。4回、「新鮮きゅうり」などを直送したところでした。初期の段階で、鮮度のよいものがなくて、喜ばれました。各会員組織の独自支援でも、そ

れぞれトラックを走らせました。また、愛知県内で、4つの病院を持っていますが、医療チーム、救護班を設けて、現地の同じJAの病院へ緊急派遣しました。共済事業では、JA共済の全国の支払い額は総額7300億になりました。かなり多額の募金を集めたと思いますが、事業を通じた支払いでも、現地の復旧につながると思います。ちなみに阪神のときの、JA共済での支払いは1000億でしたので、その7～8倍に今回はなっています。

現地支援隊ということで、4期に分け、現在3期まで進めたところです。ハウス等、農家の支援です。つぶれかかったハウスを、手で掘り起こして復旧します。30名行っても、1棟が2日で、できるかできないかの状況です。

昨日まで現地に行っていた者として、所感をお話したいと思います。日頃は、農業協同組合といえども、利益

だとか、事業だとか、経営的などに関心がいきますが、こうした大きな災害の時は、昔ながらの扶助の考え方、お互いさまという考え方が自然に持ちあがり、各組織、各会員、組合員組織の中からも自然に持ちあがってきたことは、すごくありがたいと感じました。難しい協同組合理論なり、崇高な博愛精神ではなく、お互い様というか、絆というか、共生の発想というか、こういうところが協同組合の特徴だと思います。まだまだ日本社会全体は、経済優先で、みなさん、豊かになることは願うところで、そのためには競争が必要だという考えが支配的です。自然の脅威の前では、寄り添うことが大事で、協同組合が見直されるよい機会にもなったと感じているところです。

所感も交えて、JAグループの報告とさせていただきます。

東日本大震災の支援活動のふりかえりと活かすこと コープあいち 牛田 清博 氏

3月11日に大震災があり、どのように動こうか考えました。どうしたらよいかということで、ボランティア連絡会が3月中旬に立ち上がりましたので、その前にレスキューストックヤードと愛知ネットを訪問しまして、今回の震災をどう考えたらよいかとお聞きしました。栗田さんが言われたように、「これまでの経験が全く役に立たない」「とにかく現地に入る準備をしよう」ということでした。コープあいちとしても、愛知県のみならず一緒にになっていくことにしました。コープあいちの基調は、現地への支援をしっかりとやろう、あらゆる愛知・東海や日生協のつながりを通じて総合的にやろう、行政、ボランティア、地域の皆さんと協同してやろう、東海地域の受け入れ体制をつくろう、長期の支援をしようということが決まりました。これに

沿って活動を開始しました。

1ヶ月経って、少し落ち着いたところですが、まだ、避難所では毎日カップラーメンを食べているとか、ロールケーキが朝昼晩の食事に出るなど、支援物資としてもらったものだけで毎日過ごしているということでした。そんなことがわかり、相談して、まず炊き出しに入ろうとしました。

住田町を基地にして、大船渡、陸前高田へ向かいます。車で30分のところです。木造の仮設住宅を3日後に発注した町長さんがいる住田町です。山間の町で、木材日本一の町です。毎朝、関西地域の自治体から、給水車が住田町で水を汲んで、列を成して陸前高田へ走って行きました。

その住田町の農林会館に宿泊させていただきました。



宿泊させていただいた住田町農林会館

全館ボランティアに開放されています。いろんな団体が寝泊まりしていて、コープあいちの職員も、ここに泊まりました。私たちは、気仙市民復興連絡会、陸前高田と大船渡の9団体が加盟して、愛知ネットなどが入っている連絡会で、連携して、避難所の炊き出しをしました。一緒に避難所のニーズも聞くようにしました。コープあいちも物資提供ということで関わりました。

気仙市民復興連絡会の仮設の事務所では、毎朝、朝礼をして、炊き出しを行いました。4月から6月まで行い、最初は胴鍋二つと、ガスコンロというわずかな調理器具しかありませんでしたので、仙台の業者に野菜セットをつくってもらって供給しました。そのフレッシュ小野さんは、カット野菜を、無償で近くの病院に届けた業者さんです。岩手県にわざわざもって来てくれました。頭の下がる業者さんです。ここでつくってもらった野菜を入れて、野菜たっぷりのカレーうどんをつくり提供していました。私たちは焼き鳥を持って行って、焼き台も持

っていきました。知らなかったのですが、豚汁、煮物はあるが、焼き物が全くないということで、非常な人気になり、行列ができました。その他、ボランティアの炊き出しもしました。ボランティアは、1/3くらいの方は、現地の被災された方です。この方たちからも、いろんな声を聞いて炊き出しを行いました。

避難所の中でも、炊き出しをしました。避難所の中での炊き出しは珍しいとのこと。写真は、6月初めの餅つきの様子です。6月に入り、余裕ができてきて、「ひつまぶし」をつくりました。生協の冷凍ですが、大好評



碁石コミュニティーセンター餅つき

で、お茶漬けで食べることはまずないということで、食べ方をB紙に書いてはり、食事後に365歩のマーチを大合唱しました。今度の8月のお祭りにひつまぶしを持ってきて欲しいと依頼がきて困っています。支援タオルも炊き出しといっしょに配っています。いわて生協の理事の方ともたまに知り合い、地域の福祉施設の紹介をしてもらい届け、大船渡の朝市にもタオルを持っていきました。また、宮古の沿岸部の理事の方が欲しいと言われ、お渡しすることもできました。タオルのつながりが広がっています。いわて生協の気仙コープでは青空市を開きました。地区別生協になっていますが、コープ委員

がしばらく組合員活動を休むということで、その前に私たちが出来ることを、市をやって欲しいという声をもとに開催しました。

陸前高田市では、七夕など、お祭りのシーズンです。ひつまぶしの提供をして欲しいという依頼がきています。大船渡の水産会社では、やっと氷ができて営業ができるようになり、秋刀魚のシーズンですので、秋刀魚の企画ができないか、お話を聞きしているところです。そして、愛知県の受け入れは、冷蔵庫とか家電製品配達をやりながら支援をしています。

愛知県での支援活動で思っていることは、6月13日から、愛知県から委託をうけて、NPO4団体、社協とコープあいちが一緒に支援活動に取り組んでいます。こういうところで協同組合の考え方、運営が活きるなあと思います。生協は、自助の組織で、自分たちのくらしを守るための組織です。NPOは人を助けるのがミッションですので、自ずと運営論が違います。NPO、ボランティアが集まった時のまとまりをつくる運営論としては、協同組合の考え方が活きると思います。こんなことも愛知県での備えにも大きく生きると思います。これからも地域で愛知県にみえている方と交流会を持てていきますが、組合員も参加していただいて、長い支援を出来るようにしていきたいと思っています。

最後に、2000年くらいから地域の絆が減る中で、年に一回お祭りを企画していたところ、ほとんど流されてしまい、地域で助け合ってたのも事実で、8月6日に、復興夜市をやりたいという手紙が来ました。現地で、その次の展開を、一緒に取り組んでいけたらと、コープあいちの職員の研修としても、現地ボランティアバスツアーとか、現地のガイドさんの会もあり、住田町のいいところをガイドしてもらうツアーも企画したいと考えています。

以上報告とさせていただきます。ありがとうございます。

（編集部追記：7月30日、「2011住田大感謝祭」が開催され、愛知ネットと大船渡市盛町青年商工会が共同で「ひつまぶしコーナー」を担当、たいへん喜んでいただきました。）

ゆたか福祉会における防災対策の課題と今後の課題

ゆたか福祉会 山崎 恭裕 氏

障害者団体の取組状況の報告です。ゆたか福祉会は42年前に自分たちの作業所を、自分たちの力でつくってきました。まさに協同の精神でつくってきましたが、同時に、福祉の仕事は本来公的に補償されるべきですが、公的責任を求め社会福祉法人という制度を活用して実践を通して福祉の拡充を進めてきました。

大震災後は、ただちに、全国では被災復興支援の対策

本部が立ち上がりました。愛知でも「きょうされん」愛知支部が対策本部を立ち上げました。翌週14日にゆたか福祉会でも立ち上げました。できるところからはじめようと、義援金活動に取り組み、現地への救援ボランティアの派遣をすすめました。大事なことは東日本に起きていることは、明日の我々自身のことだと、東海、東南海、南海地震をどう備えるかということで対策をすすめ

ようということです。

現地での支援活動の状況を報告します。いま日本の障害者団体すべてが結集して、「JDF日本障害フォーラム」という団体で、宮城県と福島県での支援センターを立ち上げ、全国各地から福祉現場の職員が入り、現場での被災状況や在宅の障害者の安否確認などを行っています。

行政機能そのものが崩壊しており、障害者の施設、障害者自身の安否確認が遅々としてすすまない中で、行政とタイアップして、全国の福祉の現場に働く職員が実際に現地に赴いて調査しています。直接避難所等に出向いて、障害者の実体、在宅の障害者のみなさんの実態を把握し、それを行政に伝える作業をしています。新聞報道でも明らかのように、被災で亡くなった方の65%が高齢者といわれていますが、普通の人は1%で、障害者の2%が亡くなっています。一般の方の2倍の方が亡くなっています。また避難したけれど、そこでの生活が続けられなくて、崩れた家屋の中で、真っ暗な中で避難生活を続けている方もみえました。障害を持ったことで避難

所生活が出来ないという実態が明らかになっています。

6月17日の毎日新聞では、知的障害者の相次ぐ急死という、環境の変化の中、てんかん発作等で急死をされる事例が相次ぐという報告がありました。その中で職員の思いとしては、一日も早い日常生活を取り戻す活動、作業所を1日も早く再開させること自体が、困難な状況の中で、障害を持った仲間たちを救済することになり、作業所の復興に取り組んだということが、5月15日の朝日新聞に紹介されていました。東海地震の防災マニュアルでは、警戒宣言が出されたら作業所は閉所することになっています。本当に、それでいいんだろうかということです。家庭で被災した方が、はるかに被害が大きく、施設そのものが仲間にとっては生きる場であり、そこで避難所生活が出来る体制をつくっていくことができないか、我々の体制や地域住民との連携をどうするか、今議論をしている最中です。

我々の取組状況について少し報告させていただきました。ありがとうございました。

地域と協同の研究センター 予定一覧

9月	3日	土	第2回理事会（本山 14:00～16:30）
	4日	日	第5回職員の仕事を語る会（れあろ 10:30～12:30）
	7日	水	三河地域懇談会実行委員会（豊橋 10:00～12:00）
	8日	木	食と農パネル そば種まき体験（野田農場 10:30～ ）
	9日	金	地域福祉を支える市民協同世話人会（本山 14:00～16:00）
	10日	土	第3回共同購入事業マイスターコース（本山 10:00～18:00）
	15日	木	組合員理事ゼミナール（れあろ 10:00～15:00）
	17日	土	生協の（未来の）あり方研究会（れあろ 10:00～12:00）
	26日	月	第3回常任理事会（れあろ 15:00～17:00）
	28日	水	第1回「原発事故と私たちの暮らし」連続学習交流会 （名古屋都市センター 特別会議室10:30～13:00）
10月	1日	土	第8回三河地域懇談会（岡崎市勤労文化センター10:30～）
	2日	日	〃 オプション企画（足助方面）
	6日	木	研究フォーラム職員の仕事を考える（れあろ 10:30～12:30）
	12日	水	環境パネル世話人会（本山 10:00～12:00）
	16日	日	公開企画 東山の森に学ぶ（環境パネル 10:00～ ）
	20日	木	第4回常任理事会（れあろ 15:00～17:00）
	22日	土	第4回共同購入事業マイスターコース（れあろ10:00～18:00）
	24日	月	生協の（未来の）あり方研究会（れあろ 10:00～12:00）
	29日	土	第3回理事会（本山 10:00～12:00）
	29日	土	協同組合憲章学習会（本山 13:00～15:30）

個々の企画についてのお問い合わせは、事務局までお気軽にどうぞ。

INDEX

巻頭言 「大切なものは何なのか」	川崎 直巳	1
特集 第11回総会記念シンポジウム “大震災から4カ月 私たちができたこと 学んだこと これからめざすこと		
基調報告	栗田 暢之 氏	2
現地生協の状況報告と生協間支援の報告	山下 隆之 氏	7
被災者を受け入れて	菊地 学 氏	8
JAグループ愛知復興支援対応について	岩橋 良直 氏	9
東日本大震災の支援活動のふりかえりと活かすこと	牛田 清博 氏	10
ゆたか福祉会における防災対策と今後の課題	山崎 恭裕 氏	11
地域と協同の研究センター 予定一覧		12

2011年 8月25日（偶数月25日発行）

定価200円

（税・送料込み。年会費には購読料が含まれています）
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

今号は総会特集号として、増ページで発行しました。